

SHOW HEYシネマルーム

★★★

コンフィッション (Confession)

配給/ギャガ・ヒューマックス

2003 (平成15) 年7月11鑑賞
〈ヘラルド試写室〉

Data

監督: ジョージ・クルーニー

出演: サム・ロックウェル/ドリユ
ー・バリモア/ジョージ・ク
ルーニー/ジュリア・ロバー
ツ

👁️👁️ みどころ

1970年代に実在した人気プロデューサーのチャック・バリス。彼が企画した『デート・ゲーム』は日本の人気番組『パンチDEデート』の原形だ。このチャック・バリスが裏の人生ではCIAの秘密工作員として何人もの暗殺を実行した、というのがチャック・バリスの自叙伝「危険な心の告白(コンフィッション)」。ホンマかいな・・・?こんな原作の映画化は難しいだろうが、結構面白かった。しかし、最後は「疲れて失意のどん底に・・・」というのも十分頷ける。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<原作はチャック・バリスの自伝>

この映画の原作は、1970年代を中心にアメリカのテレビ界に君臨した伝説的プロデューサー、チャック・バリス(サム・ロックウェル)が、1984年に出版した自伝『Confessions of a Dangerous Mind/危険な心の告白』だ。そしてこの原作は、彼がテレビとCIAという異質な世界での二重生活を描いたもの。すなわち、チャックは、一方では『デート・ゲーム』、『新婚ゲーム』、『ゴング・ショー』等のエンタテイメント番組(今の日本でのバラエティ番組の元祖)で、超人気のプロデューサー兼司会者として一世を風靡しながら、実は「裏人生」では、失意の時代にCIAの秘密工作員としてスカウトされ、世界各地で「暗殺」などの秘密任務を続けていたのだった。CIAの秘密工作員として殺したのは何と33人。果たしてこの危険な「告白」は本当なのか?

<テレビがこれからの世界を変える>

若く、エネルギッシュで、テレビ業界で頂点を極めることを目指すチャック・パリスは、誰もが驚くようなエンタテイメント番組の製作を目指していた。もともとチャック・パリスはかなり早熟で変なヤツ。1940年、11歳の時、初めて異性を意識したチャック・パリスは、1955年、ニューヨークでNBCの案内係の職にありつくが、女性とのセックスは手当たり次第。また、女性にもてたいばかりに管理職と身分を偽り、トラブル続きだ。このようにチャックは、悪く言えば単なる落ちこぼれだが、よく言えばなりふり構わずの上昇志向。それがチャックの本当の姿だ。

チャックは「テレビがこれからの時代を変える」と信じ、今日も「女遊び」をしながらか、テレビの新番組の企画を考えていた。こんなチャックの恋人となったのは、チャックと同様、異性関係の盛んなペニー・パチーノ（ドリュー・バリモア）。彼女は結婚なんか眼中になく(?)、チャックと毎日のようにセックスを楽しみながら、チャックの成功と一緒に夢見た。彼女は若くて美人そしてグラマーで魅力的。なんともチャックにとって便利な(?)女だ。ペニーはかなり長期間にわたって変な主人公チャックを支えることになったが、果たしてその恋の結末は・・・?

<最初の企画は『デート・ゲーム』>

チャックは職を転々としながら、そしてまた何人もの女性遍歴を重ねながら、すでに30歳。もちろん、結婚する気などさらさらなし。そして企画したのが『デート・ゲーム』。

これは衝立に仕切られた一方に1人の女性、他方に3人の男性が座り、女性が男性に対して「初めてのデートはどこに行くの？」等のオーソドックスな質問から多少エッチな質問をして、3人の男性がそれに答える。そして、その答えからベストと思う男性を女性が選択して最後に「ご対面！」というバラエティ番組だ。

当初は「品がない！」として切り捨てられたものの、空き番組ができたため採用。すると、これがバカ受けして大人気となった。テレビへの視聴者参加が急速に始まったわけだ。なお、この『デート・ゲーム』は、日本の人気番組『バンチDEデート』のお手本になったものだ。

チャックは以降も次々と視聴者参加番組を企画した。『ゴング・ショー』は、素人の「のど自慢」が次々と登場して自慢の歌を披露するが、その「下手」さに会場からはブーイング。そんな中、審査員が派手にゴングをたたいて退場してもらうというバカバカしいもの。これほど多くの「目立ちたがり屋」が出場を目指すほど、テレビが大衆化してきたのだ。

<絶頂期のチャック・パリスとCIAの仕事>

チャック・パリスには、自分の企画が採用されず不遇の時代も長かった。そんな失意の

若い時のある日、チャックは謎の男ジム・バード（ジョージ・クルーニー）から、「孤独を好み、頭が良く、世間に怒りを抱く君こそピッタリだ・・・。」と声を掛けられ、報酬の高い、ある仕事を持ちかけられた。それは何とCIAの秘密工作員になり、アメリカにとって都合の悪い人物を抹殺するという任務だ。

失意のどん底にあったチャックは、この仕事をオケー。そして、特殊訓練を受けた上、世界を股にかけて暗殺活動に乗り出し、自らも殺人を次々と実行した・・・。ホンマかいな？

この仕事のパートナーとして現れるのが、プロのエージェントである謎の美女パトリシア（ジュリア・ロバーツ）。女好きのチャックはパトリシアともいっしょになるが、なんと最後にはチャックは、CIAの裏切り者として、パトリシアと、消すか消されるかの大本戦を繰り広げることになる。間一髪、チャックの機転で、毒を盛られた酒を飲んだのはパトリシア。チャックはかろうじて、裏切り者として追及してくるCIAの手を振り切ることができたわけだ。

<チャックの神経はボロボロに>

絶頂期はいつまでも続かない。人気を誇り、週27本のレギュラー番組を持つカリスマ・プロデューサー兼司会者となっていたチャック・パリスも、過労とCIAの影、そして「俗悪番組」との批判の高まり、視聴率の低下の中、多くの番組を打ち切られることになった。そんな中で、遂にチャックはその神経がボロボロになり、ひとり安宿に閉じこもり、失意の生活を送ることになった。

そこで彼がやろうとしたことは・・・。自叙伝の執筆だ。こんな中で書かれたチャック・パリスの自伝『危険な心の告白』は実に面白いが、果たしてその真偽のほどは・・・？

2003（平成15）年7月16日記